朝日俳壇 朝日歌壇

〈日曜日のブローチ　43〉　junaida

高山れおな選

雪だるま次の朝にはどこにゐる　（糸魚川市）早津　邦彦
雪止んで宇宙から来た青い空　（福井県永平寺町）川崎　靖彦
むささびの巣が見えますと滝見台　（いわき市）中田　昇
唐突の梅が香よ汝はいずこより　（相模原市）染谷由美子
行く末は分からぬ星のいぬふぐり　（三鷹市）中田　祐子
生年は一九一九や兎太の忌　（立川市）和田　秀穂
二ン月や頭の罅の如雲に罅　（船橋市）斉木　直哉
使ひ切るアルペンザルツ二月尽　（東京都府中市）櫻井　光
ケーキ屋に客の並びて建国日　（相模原市）はやし　央
一三逝く大長考の冬灯し　（名古屋市）松末　充裕

【評】早津さん。雪達磨の句が多かった。掲句の雪達磨はまるで旅人のよう。雪達磨の存在感と一方でのはかなさを意外な視点で言い留めた。川崎さん。これも意外な言い方で勝負する句。青の鮮烈が際立つ。中田さん。冬枯れの木立ちの中に。

小林貴子選

太陽をでんぐり返しスノーボード　（蓮田市）川島　和夫
かつ丼の卵の中の三葉芹　（あきる野市）松宮　明香
豆撒きてほんに優しき気持ちかな　（青森市）天童　光宏
給食は鰯かば焼き節分会　（伊賀市）中森　里江
れおな氏に文学賞よ春立つ日　（嘉麻市）松井　春光
餅の鏡削り落として投票日　（横須賀市）高木　美波
政変は雪の日多し実朝忌　（鎌倉市）佐々木　眞
諦めて左手袋捨てにけり　（岐阜県輪之内町）松村　澄江
空にゐる春を降ろしてみませうか　（つくば市）小林　浦波
暦繰り二月は地味と汝れの言ふ　（横浜市）座間　敏正

【評】一句目、空中で何回転もする冬季スポーツで若人が躍動し、太陽も呼応。二句目、かつ丼のミツバはなぜあんなに美味しいのか。三句目、自分の身の内の鬼がいなくなったのだろう。五句目、句集『百題稽古』での読売文学賞受賞、慶賀。

長谷川櫂選

白魚のひとゆらぎして水に消ゆ　（境港市）大谷　和三
花の句を今年も詠まん汀子の忌　（高知市）和田　和子
壊れゆくこの国の民さむかりき　（川口市）青柳　悠
無いなりの心尽くしや蕗の薹　（さいたま市）齋藤　紀子
☆青森は海にも雪がつもりけり　（横浜市）三玉　一郎
反戦歌のやうに鬼に豆を撒く　（京都市）室　達朗
泥鰌掘り家が見えぬと泣く妹　（安中市）三野　勝
口中に念仏のあり寒泳ぎ　（茨木市）河本　要
大寒の何を切らむと研ぐ刃　（周南市）安達　輝美
大寒を歩きて一句得て戻る　（富士宮市）高橋　政光

【評】一席。透明な水に隠れて見えなくなる。これぞ白魚。二席。色々あるが前を向いて。桜もすぐ。三席。この国を覆う空騒ぎと不安。〈選挙では得られぬ平和痛感す〉（あらゐひとし）という投句も。十句目。ささやかにして大きな喜び。

大串章選

山深き初音に目覚む峡の宿　（奈良市）田村　英一
島の子の遠足の船春の海　（加東市）藤原　明
節分や昨年棲みし鬼払ふ　（日高市）横田　武志
ユトリロの雪の角こそ曲がりたし　（高松市）樋口淳一郎
坂の上の雲はまぼろし菜の花忌　（東京都杉並区）青木　公正
冬濤の罅りつきたる大落暉　（東京都足立区）望月　清彦
☆青森は海にも雪がつもりけり　（横浜市）三玉　一郎
激動の昭和を生きて日向ぼこ　（三郷市）木村　義熙
旅仕度リュックの上に冬帽子　（町田市）岩見　陸二
雪達磨のこして子らの帰りけり　（尾張旭市）古賀勇理央

【評】第1句。初音に目覚めて聞きふける。思い出に残る峡の宿であろう。第2句。船に乗って遠足とはユニーク、如何にも「島の子」らしい遠足。第3句。「昨年棲みし」とあるから、昨年何か被害を被ったのだろう。今年は懸命に豆撒きをする。

うたをよむ　「現代ただごと歌」最前線

今井　聡

次々に走り過ぎ行く自動車の運転する
人みな前を向く　『三齢幼虫』

現代ただごと歌のパイオニアとされる奥村晃作の歌。第一歌集所収のこの歌は、奥村曰く「気づき・認識のただごと歌」。気づきを軸として、日常の些事を、平易な言葉を用い、定型で活写する。

ボールペンはミツビシがよくミツビシ
のボールペン買ひに文具店に行く
『鴉色の足』

現代ただごと歌は、寂しい、悲しいなどの情を示す語を極力用いないことを旨とする。その根底には人のこころの動きの複雑さとそれへの懐疑を含む。奥村の生まれは昭和十一年。現代ただごと歌とは宮柊二・近藤芳美ら戦後派短歌の継承も含んでいる。叙述のかたちでそのモノ・事を述べ尽くした時、そこにこころが現れて来るのだと。これは奥村の言葉。

昨年奥村の最新歌集『天啓』（短歌研究社）が上梓された。気づき・認識の歌、叙述の歌、されど素直な言葉で偽りの無い「こころの表現」を目指す、オクムラ短歌の最新版がここにある。

寄せて来てテトラポッドにうち当たり
しぶけるまでの波を見たりき　『天啓』

地に敷ける花びらどれも一回のただ一
回の落下をせりき　同

一首目は巻頭歌、奥村の視線はテトラポッドから自ずと波の動きに移っていく。寄せて来て、うち当たり、しぶける、その懇ろな描写。二首目とともにささやかな、然しある種厳粛な自然の「ことわり」に奥村のこころが動いている。その視線はより精緻になり、表現はしなやかさ・文体の強さを増している。（歌人）

風信

澤村斉美歌集「竜の眠つてゐた跡」「塔」編集長による12年ぶりの第3歌集。「花は木を、私は君を残してゆくかもしれないがまあ飲め、けふは」（砂子屋書房・3300円）

齋藤芳生歌集「牡丹と刺繍」「かりん」選者で福島市の学習塾で教える著者による第4歌集。「春のみずが映す世界は美しいお前が石を投げ入れるまで」（現代短歌社・2970円）

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます（週に2作品まで）。QRコードから。